

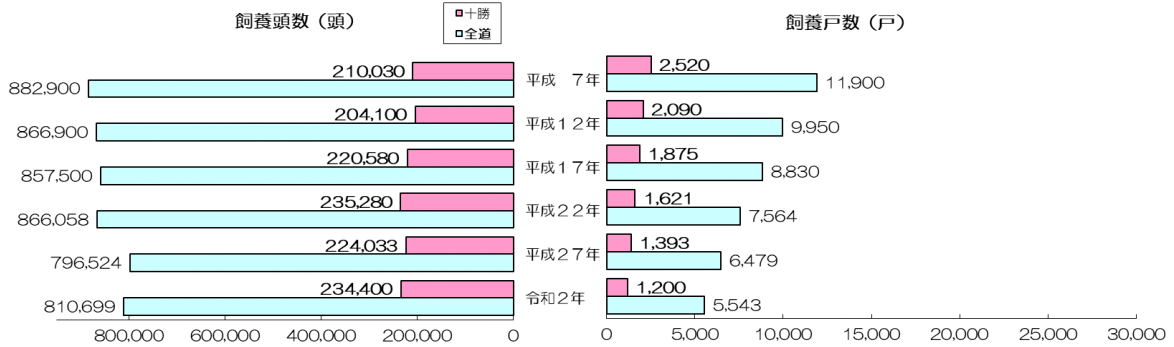
農業生産の概要(畜産)

(1) 酪農

酪農は畑作とともに十勝農業を代表する存在であり、乳用牛飼養戸数・飼養頭数、受託乳量ともに全道一を誇っている。

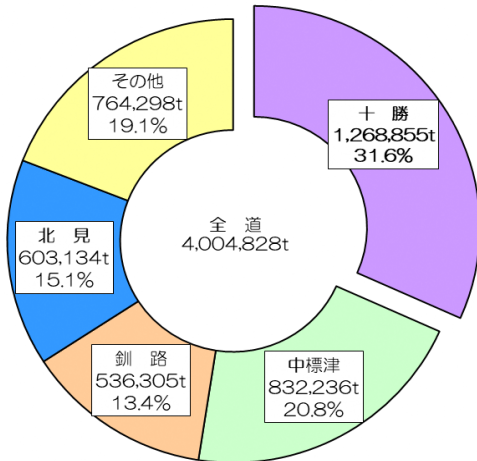
農業者の高齢化等により飼養戸数が年々減少する中、一経営体あたりの飼養頭数は増加している。十勝では、フリーストール牛舎、ミルクパーラーの導入が盛んであり、いずれも全道の普及率となっている。また、省力化のための搾乳ロボットの導入もここ数年増加しており、管内では122戸（令和3年2月現在道農政部調べ）で利用されている。

乳用牛の飼養頭数と飼養戸数の推移



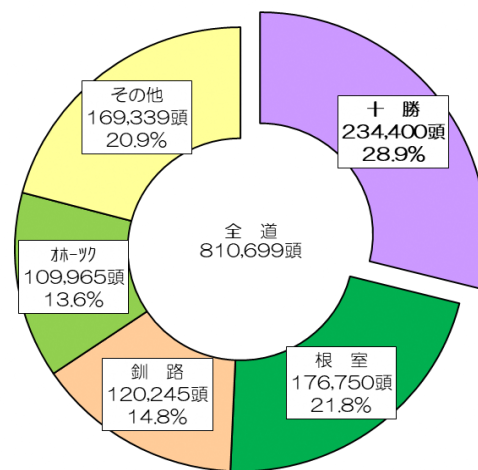
(農林水産省「畜産統計」、平成22年は「2010年世界農業センサス」、平成27年から「農林業センサス」)

受託乳量 (令和2年度)



(ホクレン農業協同組合連合会 受託乳量)

振興局別飼養頭数 (令和2年)



(2020年農林業センサス)



8 農業生産の概要(畜産)

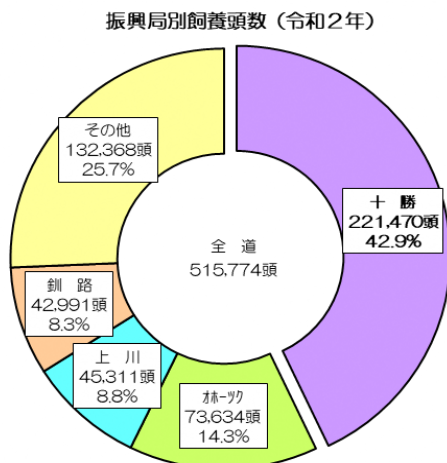
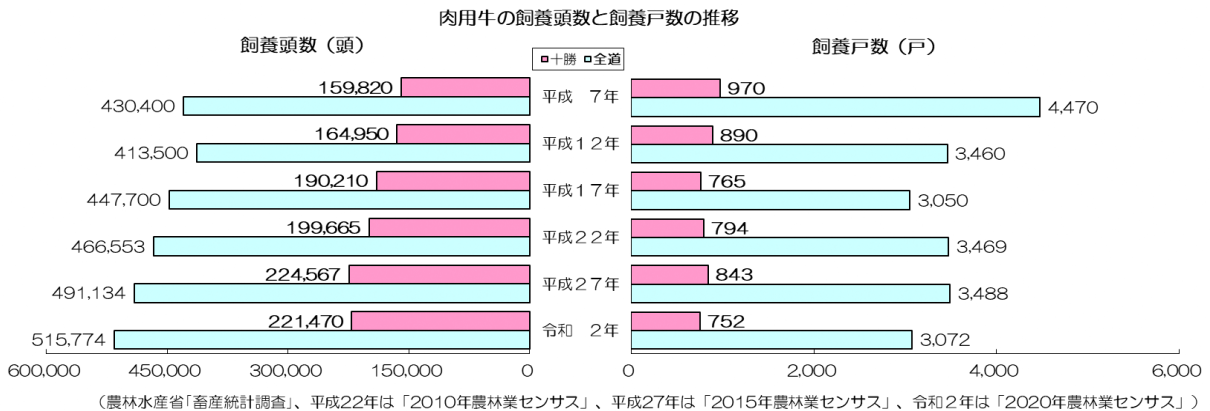
(2) 肉用牛

肉用牛は、畑作、酪農に次ぐ重要な地位を占めており、飼養戸数及び飼養頭数ともに全道一を誇っている。

十勝和牛・いけだ牛・十勝若牛をはじめ、地域や団体等で肉用牛のブランド化を進めており、生産現場においては、食の安全・安心はもとより高品質な牛肉の生産が行われている。

平成29年9月に宮城県で開催された5年に1度の「第11回全国和牛能力共進会」においては、全道23頭のうち、十勝管内から14頭が6部門に参加。6頭・3部門で優等賞を受賞、最高順位は優等賞5席となるなど好成績を残している。

また、管内ではホクレン家畜市場と十勝中央家畜市場が家畜の流通の拠点となっている。



(2020年農林業センサス)

8 農業生産の概要(畜産)

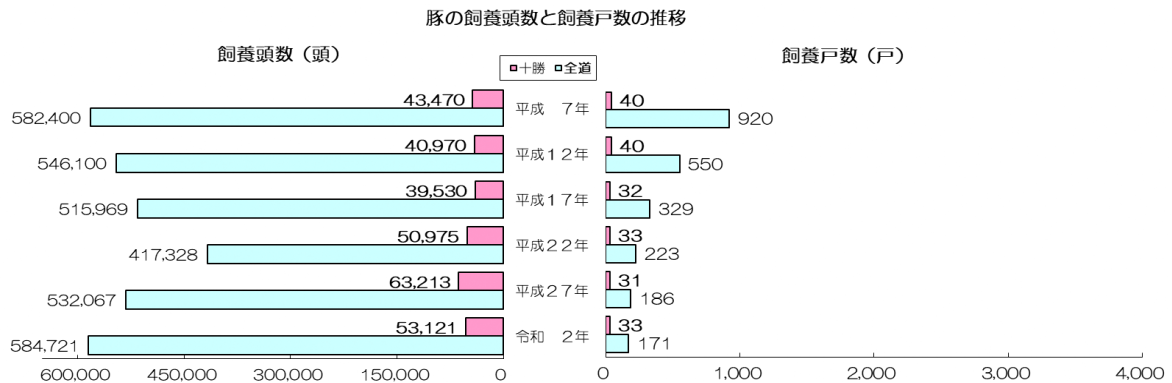
(3) 中小家畜

肉豚の飼養戸数はほぼ横ばい、総飼養頭数は平成27年の調査で大きく増加しており、大規模化が進展している。また、最近では、草地で放牧飼養する「放牧養豚」、チーズ製造時に出る水分（ホエー）を与えて育てた「ホエー豚」、モール温泉を飲ませて育てた「モール豚」など地域ブランド化に向けた様々な取組が進められている。

羊肉生産量は、北海道が全国の約8割を占めており、十勝は道内の主要産地である。近年は、羊肉の提供だけでなく、羊の毛刈りなどの体験や牧羊犬ショー、ファームインの開設など消費者との交流に関する取組も行われている。

採卵鶏は飼養戸数はほぼ横ばい、飼養羽数は減少傾向で推移している。鶏卵は、安全・安心な生産を目指すためにHACCP方針の導入、道産飼料米の活用などの取組が行われている。

また、肉用鶏は、新得町では、（地独）北海道立総合研究機構が開発した北海地鶏Ⅱを「新得地鶏」と命名し、町の新たな特産品としてブランド化を進めている。



(農林水産省「畜産統計」、平成22年は「2010年農林業センサス」、平成27年は「2015農林業センサス」、令和2年は「2020農林業センサス」)



(4) 馬

馬は、高度成長期まで農耕用として大きな役割を占めており、昭和28年のピーク時には十勝管内で6万3,527頭が飼養されていた。その後、農作業の機械化、運搬手段の変化等によって活躍の場が少なくなり、平成13年には3,361頭と大幅に減少している。

近年は、ばんえい競馬、馬肉等の需要に対応した改良増殖の促進や技術者、後継者の育成等について、関係団体が取組を進めている。

(注：平成14年以降統計なし)